

---

原 著

---

## 青年期の食行動と親子関係に関する試行的研究

伊 東 暁 子\*・竹 内 美 香\*\*・鈴 木 晶 夫\*\*\*

### 要 旨

近年、栄養学の分野だけではなく、心理学や社会学の分野においても食行動のもつ意味が重視されるようになり、研究が行なわれている。親子関係は、子どもの心理社会的発達だけではなく、食行動や食習慣にも影響するであろうと考えられる。

本研究では、Garner & Garfinkel (2000) のEating Attitude Test と今回作成した食習慣に関する項目について調査を実施した。これらの食に関する尺度の他に、Parkerら (1979) のParental Bonding Instrument (PBI)、遠藤ら (1992) の自尊感情 (SE) 尺度、両親に対する同一化の感情についても調査を行なった。

女子大学生97名 (平均年齢18.5才、SD=0.52) が本調査の対象となった。問題食の得点 (EAT) が自尊感情の下位尺度である外的評価懸念、自己不全感、羞恥感情と関連していることが明らかになった。また、親子関係が様々な次元で子ども (青年女子) の日常の食行動、食習慣に反映されていることが示唆された。近年のライフスタイルと青年女子の食行動や食習慣の関わりについて論じる。

キーワード：親子関係、ライフスタイル、食習慣、養育態度、青年女子、問題食、自尊感情

### 【1】はじめに

人間の基本的な生活を表す言葉として衣食住という言葉がある。このことから分かるように食事は、衣・住とともに人間が生きていく上で最も基本的で、重要な行為である。江戸時代で84歳まで生きた貝原益軒の著わした「養生訓」では、食べることにに関して彼の経験知をマニュアル風に非常に細かく記述している。また、「医食同源」や「薬食同源」という言葉は、食事が古くから大切にされてきたことを示している。

APA (American Psychological Association) のデータベース (PsycINFO) にeatingというキーワードが登場したのは1967年であり、松田 (1996) によると、eatingがタイトルや要約に含まれる論文は、1973年～1993年の20年間で5192論文におよび、1993年～1998年の5年間で5346論文、1999年～2004年の最新のものの約5年間で4707論文であり、増加が特徴的であることがわかる。

わが国の国立国会図書館雑誌記事検索NDL-OPACにより「食行動」を検索語として検索す

---

\*早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程

\*\*産能短期大学

\*\*\*早稲田大学人間科学部・人間科学研究科

ると、1983年以前では71件、1984～1995年の10年間で197件、1996～2000年の5年間で178件、2001年から現在まででは167件であり、同様に増加傾向を示している。

これまでの食に関する研究では、生理学と栄養学に重きをおくものが多い(川原・岩井・菅原, 1997; 浦川・佐藤・望月・二本木・渡辺・和田, 1999; 瀧本・西川, 2003)。しかし、近年では「何を食べるか」という生理学・栄養学的見地からだけでなく、「どのように食べるか」という社会・心理学的見地などからも研究が行われている(吾妻・大野・稲富・田中・太田, 2002)。

例を挙げると、社会心理学領域で知られているSchachterは、一連の研究(Schachter, Goldman, & Gordon, 1968; Schachter, 1971)から、肥満者が過食に陥りやすいのは、食物の見え、匂い、味という外的な手がかりに対して過敏に反応するためであることを示した。学習心理学領域では、Rozin (1972) が学習の重要性を指摘した。発達心理学領域では、乳幼児期の食行動は、保育、栄養指導として取り上げられ(足立・巷野, 1991)、食物嗜好などについては、根ヶ山 (1996) がある。食行動に関する研究では、近年になってようやく、食物摂食頻度とライフスタイルとの関係(門田, 2002)、食行動と健康志向との関連(市川, 1997; 小俣・市川・深見・今野, 1999)、食行動と自己効力感(Clark & King, 2000; 島井・赤松・大竹・乃一, 2000)などの研究にみられるように、健康心理学的な研究も行われるようになってきたが、心の健康の関連についてという一般適応レベルよりも障害・病理の観点から行われてきた臨床アプローチの歴史が長い。

例えば、臨床事例として決して特殊ではなかった摂食障害の問題があるが、近年深刻さを増している。摂食障害に関してはこれまで精神分析の流れから、生育史、その中でも特に家庭環境や母子関係について言及されることが多い。Bruch (1973; 1988) は、摂食障害の患者がも

つ母子関係の特徴には「母親の過干渉」「母親への依存」「母子間の信頼関係の欠如」があると指摘している。しかし、近年の研究では母子関係だけでなく、両親の夫婦関係、患者と兄弟姉妹との関係、あるいは家族内全体の関係、さらにそれを取り巻く社会的背景なども摂食障害に影響を及ぼしているとの見解が出ており(梶山, 1993)、それを追認するような報告もなされ始めている(Okon, Greene, & Smith, 2003)。

一般適応群の若い女性にも節食・過食や、やせ願望・肥満恐怖は多く見られる。摂食障害患者と一般女性のダイエット行動の共通性や連続性を報告している研究も多い(吾妻ら, 2002; 中尾・宮城, 2001; 向井, 1998)。一般適応群の中にも摂食障害と診断するほどは顕著でないにしろ、それまでの親子関係と現在の食事に対する態度に問題を含む潜在的なハイリスク者が存在していると考えられ、両群には共通した傾向が見られるのではないかと考えられている。

親子関係に関する研究としては、母子関係が子どものその後の発達に大きく影響を与えることに注目した追跡調査報告は多数あり、父親が子どもの発達に与える影響の様相についての研究も、我が国において近年ますます盛んになっている(柏木, 1993; 根ヶ山・鈴木, 1995; 根ヶ山, 2002)。親子関係は子どもが初めて築く人間関係であり、この両親との対人関係は後の行動の基盤になると考えられる。

岩村 (2003) が現代の食卓とそれを囲む家族について社会的見地から実態調査を行い、家族や食卓の変容を報告し、このような現代の社会や家庭の価値意識に我々がどのように向き合っていくべきかを議論するなど、最近では青少年の社会適応的発達と食生活・親子関係との関連を再考する動きがでてきている(足立, 2000a; 川崎, 2001)。しかしながら、「食」と「親子関係」それぞれについての先行研究は多いが、「親子関係と食行動の関連」に関心をにおいて

いる研究はまだ少ない。例えば、先にも述べた、摂食障害の人に多く見られる母子関係の分類 (Bruch, 1973; 1988) や、食事中の会話の量 (岸田・上村, 1993; 永嶋・坂口・坂口, 2001)・共に食べる頻度 (足立, 2000b; 川崎, 2001)を親子関係の指標とした調査などであり、対象者も指標も限られているのが現状である。そこで、本調査では一般適応群を対象として、母親だけではなく両親の養育態度を指標とした試行的な調査研究を行なう。

本研究では、子どもが認識する親のあり方や養育態度、親に対する同一化感情や親和感など、両親との心理社会的親子関係、さらに家庭の食に関するライフスタイルを尋ねる調査を実施し、子ども (青年) 自身の自己認知 (自尊感情) の発達に家族と食がどのように関わるか検討する。今回想定している変数については図1に示す (図1参照)。

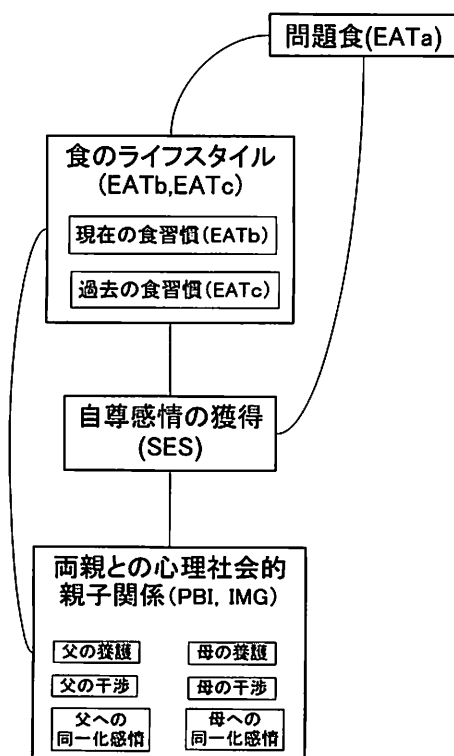


図1 本研究で想定する食行動モデル

今回調査対象となった青年は、それまで親や家庭に主導されていた食生活から、自分で選択・決定する食生活に移行していく発達的な時期にあたる。食生活の移行は家庭から友人、学校、職場など社会的な相互交渉に生活の主場面が移ることに相伴する。今回の研究では、特にダイエットについて社会的にインフォーマルな圧力を受けていると考えられる女子学生を対象として、家庭から社会生活への移行期の食生活や、食意識の様相についても調査検討する。

## 【2】方法

- (1) 対象者 東京都内の大学の「入門・心理学」科目を受講する女子学生に調査協力を依頼した。女子97名 (平均年齢18.5才 SD=0.52) が分析対象となる。
- (2) 調査内容 調査内容に含まれる変数は以下のとおりであった。

1) 食習慣に関する項目：日常の食習慣、食生活に関する岩村 (2003) の文献から食習慣に関する記述を抽出し、質問を67項目作成した。回答は、「1 全然あてはまらない」「2 少しあてはまる」「3 どちらでもない」「4 だいたいあてはまる」「5 とてもあてはまる」までの5段階で求めた。質問には現在の食習慣に関するもの (EATb) 56項目、過去の食習慣に関するもの (EATc) 11項目が含まれる。

2) 摂食態度調査表 (Eating Attitude Test以下EATとする) (Garner & Garfinkel, 1979) 日本語版：食に関する40項目のそれぞれにおいて、「1 けっして～ない」「2 まれに」「3 時々」「4 しばしば」「5 とてもしばしば」「6 いつも」の6段階で回答を求めた。この調査票は摂食障害者のスクリーニング用に開発されたものであることから、内容についてはやや深刻な項目が多い。食に関する態

度や、心のあり方を測定する。4つの反転項目を含む40項目の得点を算出し、得点が高いほど食行動危険度が高く、低いほど危険性は低いと推定される指標である。前述の食習慣の項目 (EATb, EATc) と区別するためEATaとし、問題食の指標として利用する。

3) 自尊感情尺度 (Self Esteem Scale以下SESとする) (Janis & Field, 1959; 遠藤, 1992): 自己の能力や価値についての公的、私的評価に関する感情を測定する23項目について「1 ほとんど…でない」「2 あまり…でない」「3 どちらともいえない」「4 やや…である」「5 非常に…である」の5段階で回答を求めた。総合得点は150点満点となる。点数が高いほど自分を肯定的に感じていることを示す。今回の調査協力者群については総合得点の他に、因子分析で抽出した項目別に、下位尺度点を算出し検討する。

4) PBI (Parental Bonding Instrument) (Parker, 1979; 北村・鈴木, 1986) 日本語版: 回答者が16歳以前に親からどのような養育を受けたのかについて評定を求める。親の養育態度に対する子どもの認識を測るものである。養護careと干渉protectionの項目を測定することができる。12項目の養護careと13項目の干渉protection計25項目において「1 全く該当しない」「2 あまり該当しない」「3 やや該当する」「4 該当する」の4段階で回答を求める。評定は父、母の両方について求めた。養護と干渉の点数は高いほど、養育においてその傾向が高かったとする。

5) 親に対する同一化感情尺度 (以下IMGとする) (竹内・鈴木, 2000): 回答者が現在、両親とどのような親子関係を持っているかについて評定を求める。両親に対する同一化感情、親密さ、憧れ、尊敬などを測るものである。20項目について「1 全く該当しない」「2

あまり該当しない」「3 やや該当する」「4 該当する」の4段階で回答を求める。

### 【3】結果

#### (1) 食習慣 (EATb, EATc)、問題食 (EATa) の調査

##### 1-1) 食習慣 (EATb, EATc) に関する項目の回答率

日常の食習慣に関する67項目について回答を求め、各項目の平均得点を算出し、降順に項目を並べ替えた回答率分布を図2に示す (図2参照)。

平均得点の高い項目を見ると「EATc1同じ食卓につくときは、家族は同じものを食べていた」「EATb5食 べ る こ と に 関 心 が あ る」「EATc11記念日などにはご馳走をつくってくれた」という一般的に望ましいと考えられる食習慣であった。また、「EATb24ご馳走とは、好きなものが食べられるものだと思う」「EATb56食事のとき、楽しければ少しくらい騒いでもかまわないと思う」などの項目の平均得点が高い。平均得点の低い項目は「EATb48我が家では、鍋やフライパンのまま食べ物が食卓に並ぶことがある」「EATb11我が家では、一枚のお皿に全ての料理をよそって済ませることがある」「EATb51宅配料理や出前を利用する」「EATb54我が家ではデパ地下の食品を食べる」など外食や料理にかかる手間に言及する項目が挙がっている。「EATb50なるべく1日30品目を目標にして食べている」という項目の平均得点も低い。

##### 1-2) 食習慣 (EATb, EATc) の分析

食習慣の項目 (EATb, EATc) への回答について主因子解バリマックス回転による因子分析を行なった (表1参照)。

食習慣尺度は9因子までで38.9%の累積寄与率を示した。第1因子は「EATb25家族がいても一人で食事をすることがある」、「EATb16

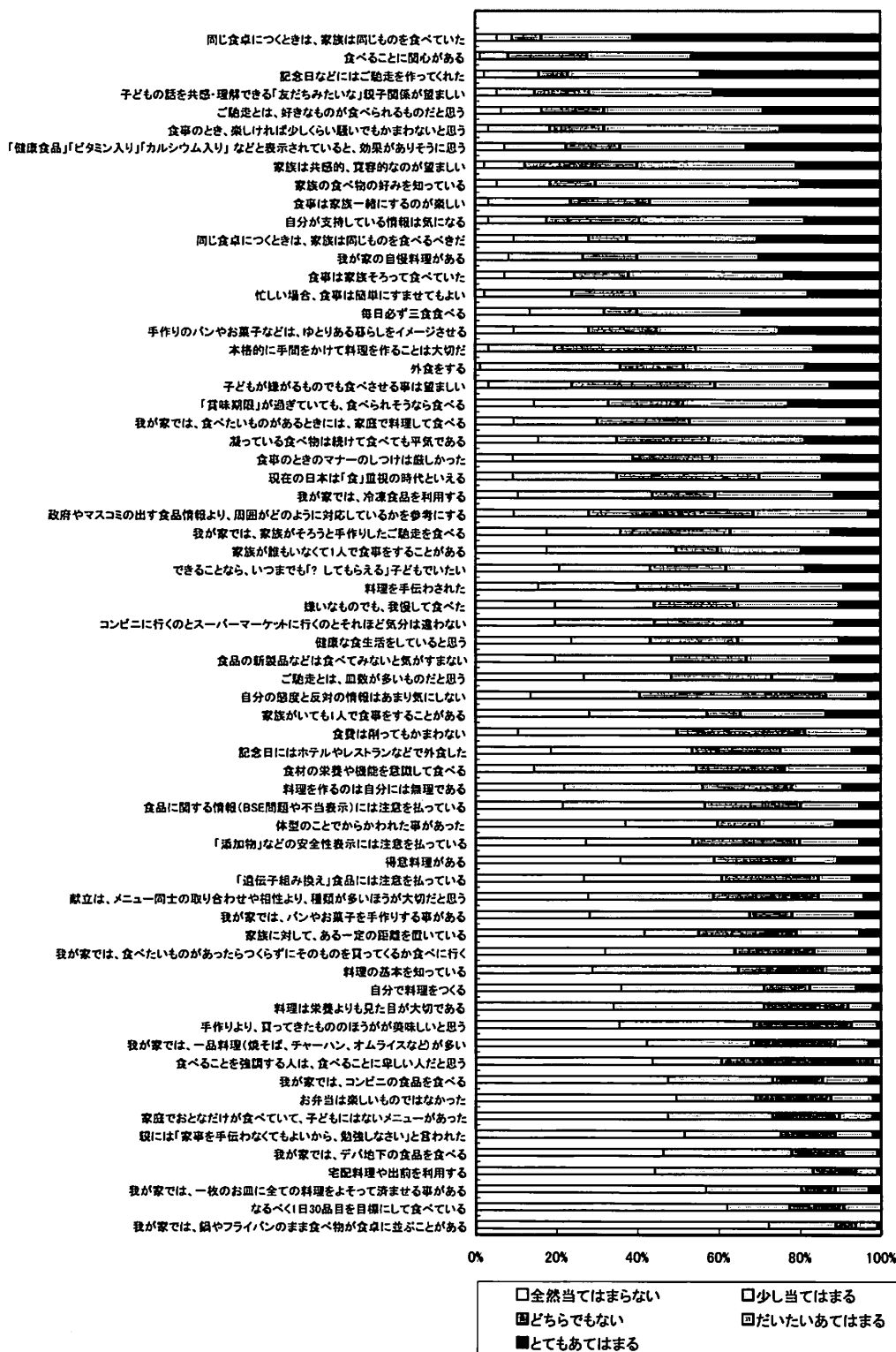


図2 食習慣 (EATb, EATc) 回答率分布

表1 食習慣 (EATb, EATc) の因子分析結果 (回転後の因子負荷量)

因子名	項目	因子									共通性
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
(求心力のない自由な食卓)	EATb25 家族がいても1人で食事をすることがある	0.621	0.012	-0.122	0.119	0.183	0.049	0.227	-0.145	0.076	0.545
	EATb45 家族が誰もいなくて1人で食事をすることがある	0.585	0.003	0.149	0.100	0.183	0.159	0.076	-0.047	-0.209	0.508
	EATb16 我が家では、食べたいものがあつたらつくらずそのものを買ってくるか食べに行く	0.540	0.073	-0.278	0.180	0.097	0.141	0.278	-0.119	0.275	0.654
	EATc5 家庭でおとなだけが食べていて、子どもにはないメニューがあつた	0.534	0.078	0.231	0.088	-0.046	-0.041	-0.047	0.053	0.013	0.366
	EATc8 食事は家族そろって食べていた	-0.533	0.142	0.170	0.032	0.092	0.125	-0.138	0.096	0.000	0.512
	EATb12 食事は家族と一緒にするのが楽しい	-0.527	0.223	0.004	0.098	0.147	0.090	0.014	-0.063	-0.094	0.394
	EATb46 家族に対して、ある一定の距離を置いている	0.504	0.098	-0.014	-0.196	-0.058	0.078	0.124	-0.142	0.086	0.385
	EATb2 家族の食べ物の好みを知っている	-0.487	0.309	0.191	0.254	0.090	0.217	-0.098	0.074	0.191	0.540
	EATb14 我が家では、コンビニの食品を食べる	0.482	0.028	-0.328	0.279	-0.106	0.048	0.068	-0.082	0.182	0.486
	EATb27 我が家では、冷凍食品を利用する	0.465	0.031	-0.289	0.184	0.171	-0.242	-0.393	-0.128	0.143	0.615
食情報の敏感さ	EATb54 我が家では、デパ地下の食品を食べる	0.419	-0.237	-0.223	0.207	0.089	0.139	-0.021	0.254	-0.035	0.421
	EATb1 我が家の自慢料理がある	-0.417	0.293	0.060	0.173	0.008	-0.028	0.002	0.375	0.036	0.537
	EATb18 自分が支持している情報は気になる	0.102	0.676	-0.015	-0.021	-0.023	0.041	0.107	0.064	-0.109	0.502
	EATb6 『健康食品』『ビタミン入り』『カルシウム入り』などと表示されていると、効果がありそうに思う	-0.041	0.548	0.010	0.219	0.028	0.025	0.018	-0.057	0.167	0.383
	EATb35 本格的に手間をかけて料理を作ること大切だ	-0.046	0.545	0.099	-0.042	0.158	-0.012	-0.074	0.182	-0.008	0.418
	EATb10 食品に関する情報 (BSE問題や不当表示) には注意を払っている	-0.100	0.417	0.418	-0.083	-0.113	0.197	-0.020	0.221	0.367	0.610
	EATc3 料理を手伝わされた	0.138	0.055	0.667	0.010	0.098	0.224	-0.199	-0.115	0.052	0.583
	EATc7 食事のときのマナーのしつけは厳しかった	-0.112	0.030	0.450	-0.058	-0.027	0.085	0.072	-0.004	-0.005	0.233
	EATc6 体型のことでからかわれた事があつた	0.037	-0.015	0.419	0.318	-0.143	0.051	0.104	-0.307	-0.189	0.493
	EATb37 忙しい場合、食事は簡単にすませてもよい	0.140	0.372	0.059	0.555	0.128	-0.017	0.258	0.159	0.051	0.584
食の道具化	EATb13 外食をする	0.057	-0.012	-0.014	0.531	0.098	0.099	0.005	-0.101	-0.174	0.360
	EATb3 食品の新製品などは食べてみたいと気がすまない	-0.073	0.110	0.066	0.456	-0.053	-0.013	0.085	0.090	0.209	0.301
	EATb32 家族は共感的、寛容的なのが望ましい	-0.240	0.236	-0.066	0.146	0.650	0.039	-0.218	0.085	-0.202	0.659
	EATb26 子どもの話を共感・理解できる「友だちみたい」な親子関係が望ましい	0.094	0.094	-0.146	0.006	0.556	0.188	-0.056	-0.016	0.187	0.426
	EATb56 食事のとき、楽しければ少しくらい騒いでもかまわないと思う	0.055	0.221	-0.141	0.135	0.533	0.074	0.276	0.010	0.116	0.492
	EATc2 記念日にはホテルやレストランなどで外食した	0.005	-0.077	0.364	0.058	0.514	-0.055	0.035	0.019	0.072	0.421
	EATb40 料理の基本を知っている	0.087	-0.165	0.046	0.155	-0.093	0.630	0.012	0.205	0.158	0.541
	EATb33 自分で料理をつくる	0.158	0.128	0.063	-0.015	0.104	0.530	0.026	-0.102	-0.002	0.355
	EATb53 得意料理がある	-0.203	0.111	0.144	-0.012	0.157	0.512	-0.042	-0.041	-0.049	0.389
	EATb30 手作りより、買ってきたもののほうが美味しいと思う	0.179	0.018	0.052	-0.023	-0.007	-0.023	0.583	-0.157	-0.108	0.436
食のコミュニケーション	EATb7 二輪走とは、皿数が多いものだと思う	-0.025	0.139	-0.089	0.285	0.048	-0.002	0.474	0.065	0.037	0.349
	EATb19 料理は栄養よりも見た目が大切である	0.128	-0.062	0.148	0.056	0.278	-0.247	0.444	0.095	0.000	0.422
	EATb23 健康な食生活をしていると思う	-0.265	0.081	-0.009	-0.027	0.101	0.005	0.076	0.555	-0.007	0.504
	EATb31 毎日必ず3食食べる	-0.193	0.046	-0.133	-0.115	0.141	-0.033	-0.012	0.551	-0.183	0.438
	EATb29 『添加物』などの安全性表示には注意を払っている	0.106	0.186	0.258	-0.015	0.009	-0.106	-0.187	0.461	-0.020	0.403
	EATb48 我が家では、国や海外のさまざまな食べ物が食卓に並ぶことがある	0.102	-0.043	-0.067	-0.013	0.073	-0.077	0.064	-0.240	0.751	0.655
	EATb44 食材の栄養や機能を意識して食べる	0.106	0.295	0.050	0.049	0.068	0.238	-0.089	0.097	0.467	0.450
	EATb41 我が家では、一枚のお皿に全ての料理をよそって済ませる事がある	0.215	-0.049	-0.023	0.223	0.234	0.030	-0.060	-0.214	0.435	0.399
	EATb15 食べることを強迫する人は、食べることに卑しい人だと思う	0.031	-0.071	0.176	-0.094	0.077	-0.175	0.059	0.053	0.428	0.304
	累積寄与率 (%)	7.112	12.181	16.274	20.344	24.360	28.303	31.989	35.460	38.928	

主因子法バリマックス回転

我が家では、食べたいものがあつたらつくらず  
にそのものを買ってくるか食べに行く」などの  
12項目の因子負荷が大きく、家族のそれぞれが  
気ままに食事をすることを示す「現代の自由な  
食卓 (求心力の無い家庭の食卓)」の因子と考え  
られる。第2因子は「EATb18自分が支持して  
いる情報は気になる」、「EATb6『健康食品』  
『ビタミン入り』『カルシウム入り』などと表示  
されていると、効果がありそうに思う」など食  
の情報に関する4項目の因子負荷が大きく「食  
情報の敏感さ」の因子と考えられる。第3因子  
は「食事のしつけ」の因子、第4因子は食事を  
なるべく簡便化することを表す「食の道具化」  
の因子、第5因子は食事の場面でのやりとりを  
通した親子関係を示す「食のコミュニケーショ

ン」の因子、第6因子は自分で料理をつくるこ  
とができるかどうかを示す「料理をつくる」因  
子、第7因子は料理の見た目を重視する「見た  
目」の因子、第8因子は食を通して健康に配慮  
する「食と健康」の因子、第9因子は食事に伴  
う手間・暇をかけない「実用本位」の因子と考  
えられる。

Cronbachの信頼性係数は全体で ( $\alpha =$   
0.731) であり、各々では「現代の自由な食卓  
(求心力の無い家庭の食卓)」( $\alpha = 0.300$ )、「食  
情報の敏感さ」( $\alpha = 0.596$ )、「食事のしつけ」  
( $\alpha = 0.432$ )、「食の道具化」( $\alpha = 0.496$ )、「食  
のコミュニケーション」( $\alpha = 0.564$ )、「料理を  
作る」( $\alpha = 0.629$ )、「見た目」( $\alpha = 0.433$ )、  
「食と健康」( $\alpha = 0.507$ )、「実用本位」( $\alpha =$

0.553)であった。下位尺度得点は、それぞれの項目の得点を合計し、含まれている項目数で割ったものであるとする。

### 1-3) これまでの食習慣に関する項目間での相関

食習慣に関する項目のうち過去の食習慣についての11項目について、項目間で相関係数 $r$ を算出し、表2に示す(表2参照)。「EATc7食事のときのマナーのしつけは厳しかった」という項目は「EATc3料理を手伝わされた」( $r=0.254, p=.01, n=97$ )、「EATc8食事は家族そろって食べていた」( $r=0.234, p=.02, n=97$ )、「EATc9嫌いなものでも我慢して食べた」( $r=0.326, p<.00, n=97$ )と有意な相関を示した。「EATc4お弁当は楽しいものではなかった」という項目は「EATc6体型のことでからかわれたことがあった」( $r=0.216, p=.03, n=97$ )、「EATc1同じ食卓につくときは、家族は同じものを食べていた」( $r=-0.221, p=.03, n=97$ )、「EATc11記念日な

どにはご馳走を作ってくれた」( $r=-0.377, p<.00, n=95$ )と有意な相関を示した。

### 1-4) Eating Attitude Test (EAT) で測定される「問題食(EATa)」項目の回答率

Garner & Garfinkel (1979) のEAT日本語版によって食に対する問題傾向をスクリーニングした。それぞれの項目の平均得点を算出したところ、平均得点の高い項目は「EATa6自分が食べ物に心を奪われていると知っている」「EATa15やせたい願望に心を奪われている」「EATa4体重が過剰になることをおそれている」「EATa7『やめられなくなるのでは』と思うぐらい無我夢中で食べてしまうことがある」であった。平均得点の低い項目は「EATa31食べ物の近くに自制のための貼り紙をしている」「EATa13食べてしまった後、吐いてしまう」「EATa39食事の後で吐きたい衝動にかられる」「EATa29ダイエット食品を食べている」「EATa32他の人が私に食べるように圧力をかけていると思う」という項目であった。

表2 過去の食習慣 (EATc) 項目間に示された有意な相関

項目	EATc1	EATc3	EATc4	EATc5	EATc6	EATc7	EATc8
EATc1 同じ食卓につく時は、家族は同じものを食べていた							
EATc3 料理を手伝わされた							
EATc4 お弁当は楽しいものではなかった	-0.221 *						
EATc5 家族でおとなだけが食べていて、子どもにはないメニューがあった							
EATc6 体型のことでからかわれたことがあった		0.225 *	0.216 *				
EATc7 食事のときのマナーのしつけは厳しかった		0.254 *					
EATc8 食事は家族そろって食べていた	0.407 **					0.234 *	
EATc9 嫌いなものでも我慢して食べた					0.232 *	0.326 **	0.228 *
EATc11 記念日などにはご馳走をつくってくれた			-0.377 **	-0.217 **			0.225 *

\*  $p<.05$

\*\*  $p<.01$

(2) 自尊感情 (SES)、親の養育態度 (PBI) と問題食 (EATa) との相関

2-1) 自尊感情 (SES)、親の養育態度 (PBI) と親に対する同一化感情 (IMG)、問題食 (EATa) 間の相関

自尊感情 (SES) 総合点、問題食 (EATa) の得点、PBIより父の養護 (FCARE)・干渉 (FPROT) 得点、母の養護 (MCARE)・干渉

(MPROT) 得点間の相関係数 $r$ を表3に示す(表3参照)。

自尊感情 (SES) と問題食 (EATa) の間に有意な相関が見られた( $r = -0.271, p < .01, n = 97$ )。また、父母の養護 (CARE)・干渉 (PROT) はいずれの組み合わせでも5%未満で有意に高い相関が見られた。自尊感情 (SES) と父母の養育態度 (PBI) の間には有意な相関は見られ

表3 自尊感情 (SES)、問題食 (EATa)、養育態度 (PBI) 間の相関

	自尊感情 (SES)	父-養護 (FCARE)	父-干渉 (FPROT)	母-養護 (MCARE)
問題食(EATa)	-0.271 **			
父-干渉(FPROT)		-0.321 **		
母-養護(MCARE)		0.499 **	-0.202 *	
母-干渉(MPROT)		-0.203 *	0.550 **	-0.269 **

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

表4 養育態度 (PBI) と食習慣 (EATb, EATc) との相関

項目	自尊感情 (SES)	父-養護 (FCARE)	父-干渉 (FPROT)	母-養護 (MCARE)	母-干渉 (MPROT)
EATb7 ご馳走とは、血敵が多いものだと思う	-0.272 **				
EATb15 食べることを強調する人は、食べることに卑しい人だと思う		-0.274 **			
EATb16 我が家では、食べたいものがあつたらつらずにそのものを買ってくるか食べに行く				-0.203 *	
EATb17 食費は削ってもかまわない	-0.259 *				
EATb18 自分が支持している情報は気になる	-0.269 **				
EATb22 我が家では、一品料理(焼そば、チャーハン、オムライスなど)が多い			-0.264 **		
EATb24 ご馳走とは、好きなものが食べられるものだと思う			-0.213 *		
EATb26 子どもの話を共感・理解できる「友だちみたいな」親子関係が望ましい	0.204 *				
EATb28 子どもが嫌がるものでも食べさせる事は望ましい			-0.233 *		-0.216 *
EATb34 我が家では、食べたいものがあるときには、家庭で料理して食べる	0.207 *				
EATb36 政府やマスコミの出す食品情報より、周囲がどのように対応しているかを参考にする			-0.220 *		
EATb42 手作りのパンやお菓子などは、ゆとりある暮らしをイメージさせる	-0.220 *				
EATb53 得意料理がある	0.271 **				
EATb54 我が家では、デパート地下の食品を食べる		-0.211 *			

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$



なかった。問題食 (EATa) も父母の養育態度 (PBI) との間には有意な相関が見られなかった。

次に、食習慣項目 (EATbとEATc) のそれぞれについて親の養育態度 (PBI)、自尊感情 (SES) との相関を求めた。有意に相関の高い項目を表4に示す (表4参照)。父の干渉 (FPROT) は食習慣項目の「EATb22我が家では、一品料理が多い」、「EATb24ご馳走とは好きなものが食べられるものだと思う」、「EATb28子どもが嫌がるものでも食べさせる事が望ましい」などと負の相関を示している ( $r = -0.264 \sim r = -0.213$ )。

自尊感情 (SES) との間には有意な相関を示す項目は7項目ある。即ち、「EATb7ご馳走とは、皿数が多いものだと思う」 ( $r = -0.272, p < .01, n = 97$ )、「EATb17食費は削ってもかまわない」 ( $r = -0.259, p < .05, n = 96$ )、「EATb18自分が支持している情報は気になる」 ( $r = -0.269, p < .01, n = 96$ )、「EATb26子どもの話を共感・理解できる『友だちみたいな』親子関係が望ましい」 ( $r = 0.204, p < .05, n = 95$ )、「EATb34我が家では、食べたいものがあるときには、家庭で料理して食べる」 ( $r = 0.207, p < .05, n = 96$ )、「EATb42手作りのパンやお菓子などはゆとりある暮らしをイメージさせる」 ( $r = -0.220, p < .05, n = 96$ )、「EATb53得意料理がある」 ( $r = -0.271, p < .01, n = 95$ ) である。父の干渉得点 (FPROT) と有意に高い相関を示した項目は「EATb22我が家では、一品料理 (焼きそば、チャーハン、オムライスなど) が多い」 ( $r = -0.264, p < .01, n = 95$ )、「EATb24ご馳走とは、好きなものが食べられるものだと思う」 ( $r = -0.213, p < .05, n = 95$ )、「EATb28子どもが嫌がるものでも食べさせることは望ましい」 ( $r = -0.233, p < .05, n = 94$ )、「EATb36政府やマスコミの出す食品情報より、周囲がどのように対応しているかを参考にする」 ( $r = -0.220, p < .05, n = 95$ )、である。また「EATb28子どもが嫌が

るものでも食べさせることは望ましい」 ( $r = -0.220, p < .05, n = 95$ ) は父と母の干渉 (FPROTとMPROT) で有意に高い相関を示した。

## 2-2) 自尊感情尺度 (SES)

自尊感情尺度の総合得点の他、事項別に下位尺度を抽出するために主因子解バリマックス回転による因子分析を行った (表5参照)。

自尊感情尺度は4因子までで46.1%の累積寄与率を示した。第1因子は「SE19他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたはどのくらい気になりますか」「SE21自分の意見に同意しない人々を説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか」などの9項目の因子負荷が大きく、自分が他人からどう見られているか気にする程度を表している「外的評価懸念」の因子と考えられる。第2因子は「SE6あなたは、自己嫌悪をおぼえること (自分で自分が嫌になること) がありますか」「SE5あなたは、自分に落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか」などの4項目の負荷が大きく、自分がうまくできないと感じる程度を表す「自己不全感」の因子と考えられる。第3因子は、対人場面における恥かしさを表している「羞恥感情」の因子、第4因子は「他の人と比べてうまくできる・できない」にこだわる「優越・劣等感情」の因子と考えられる。

Cronbachの信頼性係数は自尊感情尺度全体で ( $\alpha = 0.86$ ) であり、各々では「外的評価懸念」 ( $\alpha = 0.86$ )、「自己不全感」 ( $\alpha = 0.82$ )、「羞恥感情」 ( $\alpha = 0.80$ )、「優越・劣等感情」 ( $\alpha = 0.24$ ) であった。

また、23項目のうち2項目は上記の4因子に収束しなかったので自尊感情下位尺度得点関連の解析から除外する。下位尺度得点とはそれぞれの項目の得点を合計し、含まれている項目数で割ったものである。

表5 自尊感情尺度 (SES) の因子分析結果 (回転後の因子負荷量)

因子名	項目	因子					
		1	2	3	4	5	6
外的評価懸念	SE23 他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたはどのくらい気になりますか	0.826	0.141	0.219	0.177	-0.133	0.015
	SE21 自分の意見に同意しない人々を説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか	0.701	0.155	0.074	0.135	0.175	0.159
	SE22 あなたの友達や知合いのなかにあなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき、あなたはそのことをどのくらい気にしますか	0.619	0.143	0.181	0.181	0.086	0.011
	SE10 あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評をどのくらい気にしますか	0.533	0.160	0.164	-0.045	0.139	-0.105
	SE9 あなたは、自分が他の人々とどのくらいうまくやってゆけるかということについて気にしますか	0.526	0.328	0.361	0.206	0.137	-0.060
	SE19 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか	0.501	0.163	0.136	0.167	0.441	0.113
	SE17 どんでもないミスやばかにされるような大失敗をしかしたとき、あなたはどのくらい長そのことを気にしますか	0.472	0.151	0.185	0.153	0.361	0.055
	SE15 他の人々から、あなたが職業や経歴における成功者(または優等生)とみられているか、あるいは失敗者(または劣等生)とみられているかということについて、あなたは気になりますか	0.460	0.278	0.055	-0.108	0.302	0.292
	SE14 他の人々がみているところで、ゲームやスポーツをやったり、それに是非勝とうと思っている場合、あなたはふつうどのくらいとり乱したり、まごついたり(あがったり)しますか	0.302	0.142	0.133	0.250	0.075	0.019
自己不全感	SE6 あなたは、自己嫌悪をおぼえること(自分で自分がいやになること)がありますか	0.229	0.818	0.165	0.092	0.168	0.067
	SE5 あなたは、自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか	0.202	0.692	0.086	-0.021	0.198	0.151
	SE8 あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがどのくらいありますか	0.268	0.524	0.200	0.227	0.228	0.176
	SE20 あなたは、恥しくてどうにもならないと思うことがありますか	0.261	0.503	0.444	-0.048	0.050	0.209
羞恥感情	SE12 あなたは、人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがありますか	0.247	0.167	0.826	0.200	0.085	-0.053
	SE13 あなたは、クラスや自分の同年輩の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり、不安に思ったり	0.261	0.211	0.636	0.288	0.210	0.121
	SE11 あなたは、他の人々がすでに集まって話合っている部屋に自分一人ではいっていきような場合、気兼ねや不安をおぼえますか	0.286	0.187	0.625	0.024	0.266	0.128
	SE18 あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのがむずかしいですか	0.090	0.227	0.324	0.272	0.161	0.523
優越・劣等感情	SE2 あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか	-0.101	-0.201	-0.075	-0.847	-0.116	-0.113
	SE3 あなたは、自分の知っている人々が、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくると確信していますか	-0.157	0.173	-0.005	-0.701	-0.079	0.054
	SE7 一般に、あなたは自分のいろいろの能力についてどのくらい自信をもっていますか	-0.114	-0.159	-0.280	-0.557	0.048	-0.114
	SE1 あなたが知っている大部分の人々に比べて自分の方が劣っていると感じるようなことはありますか	0.073	0.299	0.160	0.429	0.221	-0.344
	SE16 人と一緒にいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらいかがについて、困りますか	0.189	0.184	0.263	0.132	0.667	0.021
	SE4 あなたは、自分の過誤(ミス)は自分のせいだと感じるものが、どのくらいありますか	0.100	0.387	0.104	0.099	-0.029	-0.107
累積寄与率(%)		14.973	26.049	36.313	46.067	51.726	54.813

主因子法バリマックス回転

自尊感情の下位尺度と食習慣に関する項目との相関係数 $r$ を算出し、5%未満で有意に相関の高かった項目を表6に示す(表6参照)。「外的

評価懸念」、「自己不全感」、「羞恥感情」の3尺度と有意な正の相関を示す項目は「EATb17食費を削ってもかまわない」であり、3尺度と有

表6 自尊感情下位尺度と食習慣 (EATb, EATc) の相関

	外的評価懸念	自己不全感	羞恥感情	優越・劣等感情
EATb4 我が家では、家族がそろ うと手作りしたご馳走を 食べる。				0.306 **
EATb7 ご馳走とは、皿数が多い ものだと思う。	0.340 **	0.230 *		
EATb12 食事は家族一緒にするの が楽しい。			-0.228 *	
EATb17 食費は削ってもかまわな い。	0.230 *	0.303 **	0.223 *	-0.228 *
EATb18 自分が支持している情報 は気になる。	0.268 **	0.239 *		
EATb21 自分の親を「彼（彼女） は・・・」のように表現 することがある。				0.232 *
EATb22 我が家では、一品料理 （焼そば、チャーハン、 オムライスなど）が多 い。				-0.224 *
EATb24 ご馳走とは、好きなもの が食べられるものと思 う。		0.225 *		
EATb26 子どもの話を共感・理解 できる「友だちみたい な」親子関係が望まし い。	-0.205 *			
EATb32 家族は共感的、寛容的な のが望ましい。	-0.219 *			
EATb34 我が家では、食べたいも のがあるときには、家庭 で料理して食べる。	-0.237 *	-0.220 *		
EATb46 家族に対して、ある一定 の距離を置いている。		0.235 *	0.202 *	
EATb52 同じ食卓につくときは、 家族は同じものを食べる べきだ。	0.213 *	0.234 *		
EATb53 得意料理がある。			-0.246 *	0.286 **
EATb56 食事のとき、楽しければ 少しくらい騒いでもかま わないと思う。				0.212 *
EATc1 同じ食卓につくときは、 家族は同じものを食べて いた。			0.215 *	
EATc2 記念日にはホテルやレス トランなどで外食した。				0.441 **
EATc5 家庭でおとなだけが食べ ていて、子どもにはない メニューがあった。		0.281 **	0.207 *	
EATc10 親には「家事を手伝わな くてもよいから、勉強し なさい」と言われた。		0.240 *		
EATc11 記念日などにはご馳走を 作ってくれた。	-0.259 *	-0.279 **	-0.229 *	

\* p<.05 \*\* p<.01

意な負の相関を示す項目は「EATc11記念日などにはご馳走を作ってくれた」であった。

## 2-3 両親との心理社会的関係と食習慣の関係

父母に対する同一化感情（FIMGとMIMG）、同一化感情得点の両親間の差（=FIMG-MIMG）、養護得点の両親間の差（=FCARE-MCARE）、干渉得点の両親間の差（=FPROT-MPROT）と食習慣（EATbとEATc）につい

での相関係数を算出し、5%未満で有意な相関が見られた項目を表7に示す（表7参照）。父母のどちらについても1%未満で有意な相関が見られる項目は5項目で、そのうち「EATb1我が家の自慢料理がある」「EATb2家族の食べ物の好みを知っている」「EATb12食事は家族一緒にするのが楽しい」「EATc8食事は家族そろって食べていた」が正の相関を示し、「EATb46家族に対して、ある一定の距離を置いている」が

表7 養育態度(PBI)、同一化感情(IMG)による親に関する諸変数と食習慣(EATb,EATc)との相関

	父・同一化感情	母・同一化感情	干渉の差 (FPROT-MPROT)	同一化感情の差 (FIMG-MIMG)
EATb1 我が家の自慢料理がある	0.316 **	0.311 **		
EATb2 家族の食べ物の好みを知っている	0.284 **	0.334 **		
EATb4 我が家では、家族がそろって手作りしたご馳走を食べる	0.261 *			0.310 **
EATb12 食事は家族一緒にするのが楽しい	0.466 **	0.420 **		
EATb17 食費は削ってもかまわない	-0.267 *	-0.250 **		
EATb25 家族がいても1人で食事をすることがある	-0.225 *	-0.270 **		
EATb27 我が家では、冷凍食品を利用する	-0.259 *			
EATb30 手作りより、買ってきたもののほうが美味しいと思う				0.262 *
EATb32 家族は共感的、寛容的なのが望ましい		0.272 **		
EATb34 我が家では、食べたいものがあるときには、家庭で料理して食べる	0.311 **	0.217 *		
EATb38 コンビニに行くのとスーパーマーケットに行くのとそれほど気分は変わらない			-0.209 *	
EATb46 家族に対して、ある一定の距離を置いている	-0.274 **	-0.507 **		0.238 *
EATb54 我が家では、デパ地下の食品を食べる	-0.297 **			
EATb56 食事のとき、楽しければ少しくらい騒いでもかまわないと思う				0.213 *
EATc2 記念日にはホテルやレストランなどで外食した	0.208 *			
EATc4 お弁当は楽しいものではなかった		-0.365 **		
EATc5 家庭でおとなだけが食べていて、子どもにはないメニューがあった	-0.210 *			
EATc8 食事は家族そろって食べていた	0.308 **	0.339 **		

\* $p<.05$  \*\*  $p<.01$

負の相関を示した。

(3) 自尊感情 (SES)、両親への同一化感情 (IMG) と問題食 (EATa)、食習慣 (EATb, EATc) との関わり

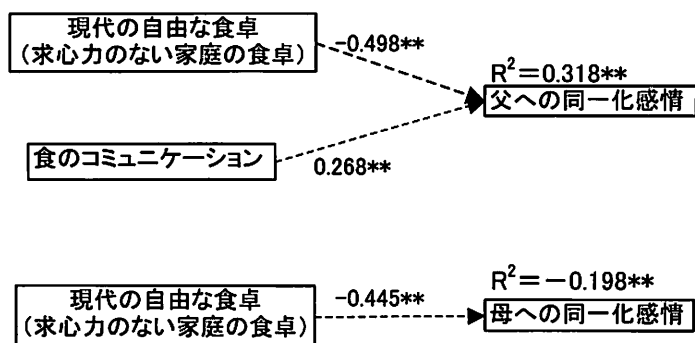
3-1) 食習慣 (EATb, EATc) と同一化感情 (IMG) の関わり

父母それぞれへの同一化感情 (FIMG, MIMG) を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行なった。独立変数は食習慣 (EATb, EATc) の因子分析で得られた下位尺度である。なお、独立変数間の相関係数を算出したところ、最も高い値でも「現代の自由な食

卓 (求心力の無い家庭の食卓)」と「食と健康」の間の $r=-0.259$ であり、多重共線性の影響は小さいものと判断した。

二つの分析の結果、標準偏回帰係数が1%水準で有意になったパスをまとめて図3に示す(図3参照)。

まず、父親への同一化感情 (FIMG) を従属変数として重回帰分析を行なったところ、「現代の自由な食卓 (求心力の無い食卓)」と「食のコミュニケーション」の2尺度が選出された ( $R^2=0.318$ ,  $p<.01$ )。「現代の自由な食卓 (求心力の無い食卓)」からは、父親への同一化感情 (FIMG) への負のパスが示された ( $\beta=-0.498$ ,



\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ 。なお、数値は標準偏回帰係数  $\beta$  である。また、実線の矢印は正の影響を、点線の矢印は負の影響を表す。

図3 食習慣の下位尺度が父母への同一化感情へ与える影響を示すパス・ダイアグラム

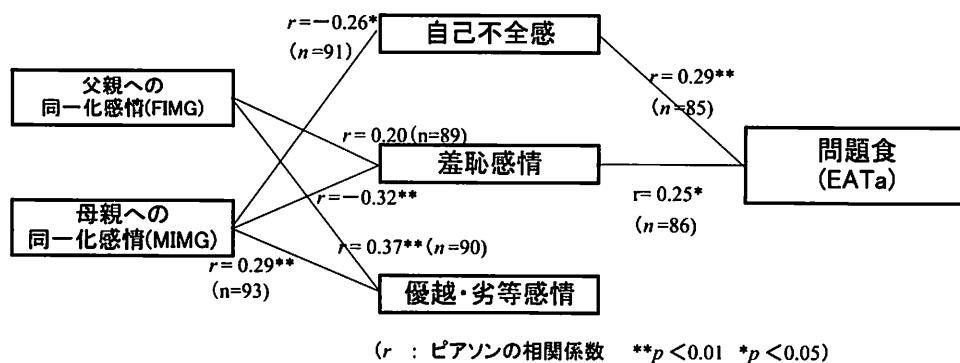


図4 同一化感情(IMG)、自尊心の下位尺度、問題食(EATa)項目間の関連ダイアグラム

$p < .01$ ) また、「食のコミュニケーション」からは、父親への同一化感情 (FIMG) への正のパスが示された ( $\beta = 0.268$ ,  $p < .01$ )。

次に、母親への同一化感情 (MIMG) を従属変数として重回帰分析を行なったところ、「現代の自由な食卓 (求心力の無い食卓)」が選出され ( $R^2 = -0.198$ ,  $p < .01$ )、母親への同一化感情 (MIMG) への正のパスが示された ( $\beta = -0.445$ ,  $p < .01$ )。

3-2) 自尊感情 (SES)、両親への同一化感情 (IMG)、問題食 (EATa) の関わり

自尊感情の下位尺度、両親との関係を表す諸変数と問題食 (EATa) 間の相関係数  $r$  を算出した。変数間に有意な相関が算出されたもの ( $p < .05$ )、有意傾向が見られたもの ( $p < .06$ ) を残し、相関関係を一覧するために、図4を示す (図4参照)。父母への同一化感情が自尊感情 (SES) に関わっていることが示されている。親への同一化感情 (IMG) と「優越・劣等感情」の間には正の相関が見られ、同一化感情 (IMG) と「自己不全感」、「羞恥感情」には負の相関が見られた。また、自己不全感と羞恥感情は問題食 (EATa) と正の相関が見られる。

#### 【4】考察

昨今のライフスタイルの変化により、食のライフスタイル（食習慣）も変化を遂げていると報告している調査研究が多い（例えば岩村，2003など）。今回は、青年期女子の食習慣と食に対する態度の現状を把握する目的で調査を行った。さらに、子ども自身の自尊感情や、子どもが認識するこれまでの親子関係、親に対する同一化感情や親和感などとの関わりを検討した。親子関係や親に対する同一化親和感情と食習慣の関わり、自尊感情と親子関係・親に対する同一化感情、食習慣、問題食の関わりについて以下に考察する。

##### 1) 青年期女子の食習慣と問題食について

食習慣についての回答率の上位に、家族一緒に健康的な食事を楽しむ様子を示唆する項目が集まり、健康上問題と考えられるような食習慣に関する項目は下位に集積した。栄養に関する知識や、自発的な調理行動に関する項目に「とてもあてはまる」、「だいたいあてはまる」と答えた学生は少ない。このことから、今回の調査対象者においては、「現在、自分では自発的に調理に携わらないが、家族によって健康的な食生活が支えられている」と考えている者が多いことが示唆された。また、問題食の項目においては、「食べたいけれど、やせたい」という矛盾を抱えつつも、極端なダイエットを実施するまでには至らない学生が多く、マスコミ情報の文脈で言うところの一般的イメージを感じさせる傾向が示唆された。一般的傾向ではあっても、女子学生の多くが食べることにに関して、心の中に矛盾を抱えており、摂食障害の特徴とされる「やせ願望」や「肥満恐怖」を少なからずもっているという一人一人の現状は重くとらえるべきであろう。青年女子の通奏低音的あるいは基底的な「やせ願望」は、食行動・食態度を不適応（問題食）に導く危険因子である。実際に、健康を害する事態を発生させないような教育支援をする必要があることも今回の調査からも読み取

れる。

今回の試行的調査からは、「手間や時間やお金をかけない食事」が低い自尊感情と関連していることも示唆された。食事にどのような「コスト」をかけ得るかには個人差があるので一概には言えないが、食を相対的に重要と位置づける態度は健康な心身の発達の実現に望ましいと考えられる。

昨今では、ライフスタイルの変化によって食のライフスタイル（食生活）も極めて多様な様相を呈している。食生活は人の身体のみならず、心の健康や成長にも大きな影響を及ぼす。食事についての正しい理解と望ましい食習慣を身につける早期教育と持続的支援プログラムの必要性を感じる。食習慣は、成人期以降の生活習慣病の発症にも深く関連し、そのことはまた生涯の生活の質（QOL）に大きく影響を及ぼす（草間，1992）。これらを踏まえると、青年期学生を対象とした健康的に望ましい食行動の指導はもとより、小・中・高校における早期食教育こそ急務と言えよう。

##### 2) 心理社会的親子関係と食習慣の関連について

家族にとって食事を共に食べるということは何を意味するのであろうか。今回の結果から、家族の食事の場についてのイメージをまとめてみると以下になるだろう。即ち、家族と一緒に食事を楽しむのは「互いの存在を確認しながら楽しみを分かち合う場面」であり、また食事を通してマナーなど人間関係のスキルの伝達が行われる場面、「子どもが社会を知る場」であると考えられていることが示唆された。家族揃っての食事は、ただ食欲を満たすだけではなく、有形・無形の様々な人間関係的な相互作用がなされる意味を含んでいる。これらのやりとりは、子どもの心理・社会的発達、特にコミュニケーションのレパートリーの獲得やスキルトレーニングにも大きく影響を与えるものであろう。

また今回の結果について特筆すべきことは、

家族の食習慣と父親の存在に何らかの関連がある可能性が示唆された点であろう。食行動と親子関係は、相互に影響を及ぼしあっていると考えられるため、因果関係を一方向に断定することは出来ないが、今回の結果からは、干渉 (protection) 傾向が高いと評定される父親が食事の献立の決定にも権限を有しており、家族の食事のあり方の方向性にも影響を与えているらしいことが推測された。いろいろな料理を好き嫌いしないで食べさせられた子ども (青年女子) ほどそのような干渉 (protection) 傾向の高い父親をもつのではないだろうか。

また、家族が各々気ままに食事をする「求心力のない家庭の食」から父への同一化感情への負のパス、食事を介した親子関係やコミュニケーションを表す「食のコミュニケーション」から父への同一化感情への正のパスが見られたことから、家族の食事のありかたが父親の存在と関連していると考えられるのではないだろうか。

さらに、食に手間や時間、お金などのコストをかけて家族での食事を楽しむと回答している子どもほど、父への同一化感情が高く、彼らはまた自尊感情も高い傾向を示した。同じ傾向は、母親への同一化感情についても言える。子どもの親に対する同一化感情は親の温かで受容的な養育態度から醸成されるものであろう。家族で楽しんで食事をするを通して、子どもが両親を温かで受容的であると認識することができ、両親に親しみや憧れを感じ、自分についても肯定的に受けとめる自尊感情が高められるのではないだろうか。そして、自分を十分な存在として評価し、自らの生きて在ることを受け入れることこそ、さらに積極的に食事を楽しむ態度につながるということも言えそうな結果である。

これまで、子どもの食事というと母子関係に注目することが多かった。それは、一般的に母親が食事作りを担ってきた日本の社会的慣習によるものであり、同じ文脈で母親は家庭で子どもと接する時間が長いと、子どもに影響を与

える機会が父親より圧倒的に多い物理的条件の差によるものであった。今回の調査対象者は特に青年女子であることを考慮すると、一般的に父親の方が母親に比べて実質的な接触時間は短いと考えられる。しかし、父親の存在が子どもの食習慣に少なからぬ関連している可能性が推測されたことは興味深い。さらに母親を介在させた父親の影響のパスも今後検討する必要があるであろう。

### 3) 今後の課題

本研究では青年期女子の食行動と親子関係の関連について検討することが目的であったが、本調査は都内の大学に通う学生から対象者を抽出しており、ライフスタイルや居住形態等においては大きな幅がないグループのデータとなった。今回のデータから結果を一般化することには、慎重さを要する。今後はさらに対象者を増やして幅広く検討していくことが必要となる。食習慣・食行動に関する項目においても、記述式調査という性質上の限界がある。実際の食習慣を正しく反映した回答、もしくは評定になっているのか明らかではない。例えば可能なら、調査と同時進行で、観察・実験など、実際の場面での食習慣・食行動を評定する手続きも今後求められるのではないかと考えている。

食は生理的欲求の充足だけではなく、人間関係形成の場、レクリエーション (re-creation: 再生産) の一環、美容健康・生活の質 (QOL) を左右するなど、多様な意味を持つ。それと同時に、様々な問題を含んでいると考えられる。今回の研究を起点として食行動の意味、問題の世代間・文化間比較も今後の検討課題としたい。

### 付記

本研究は、2002-2003年度「ケア場面におけるスタッフ及びクライアントの身体接触許容度の評価と教育」文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 (C) (1), 課題番号 14510180 の一部である。

# 【引用文献】

- 足立己幸 2000 a 共食感から見た子どもたちの食生活 からだの科学 212, 39-42.
- 足立己幸 2000 b 知っていますか子ども達の食卓 NHK出版
- 足立己幸・巷野悟郎 1991 乳幼児からの食事学 一心とからだを育てる 有斐閣
- 足達淑子 1997 食行動と健康 島井哲志(編) 現代心理学シリーズ15 健康心理学 培風館
- 吾妻ゆみ・大野弘之・稲富宏之・田中悟郎・太田保之 2002 女子大学生における食行動の実態とその社会・心理的要因について 精神医学 44, 521-527.
- Bruch,H. 1973 Eating Disorder: Obesity,Anorexia Nervosa, and the Person Within. Basic Books: NewYork
- Bruch,H. 1988 Conversations with anorexics. (岡部祥平, 溝口純二 訳 1993 やせ症との対話. 星和書店.)
- Clark,M.M. & King,T.K. 2000 Eating self-efficacy and weight cycling. A prospective clinical study. Eating Behaviors, 1, 47-52.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽(編) 1992 セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版 Pp.29-31.
- Garner, D. M.,&Garfinkel,P.E. 1979 The Eating Attitudes Test: an index of the symptoms of anorexia nervosa. Psychological Medicine. 9, 273-279.
- 市川陽子 1997 大学生の健康志向と食行動特性(第2報) 日大生活科研報20, 25-34.
- 今田純雄 1992 食べる 一日常場面における人間の食行動に関する心理学的考察一 心理学評論 35 (4) , 400-416.
- 今田純雄 1997 食行動研究の過去と現在 行動科学 36, 13-23.
- 岩村暢子 2003 変わる家族・変わる食卓 勁草書房
- Janis,I.L., & Field,P.F. 1959 The Janis and Field Personality: Feelings of Inadequacy. Personality and Persuasibility. pp.300-301,Yale University Press: New Haven.
- 貝原益軒 1982 養生訓 全現代語訳 伊藤友信 訳 講談社
- 柏木恵子 1993 父親の発達心理学 川島書店
- 川原崎淑子・岩井万智子・菅原康二 1997 女子学生の食行動(1) -「好き・嫌い」の食品調査一 園田学園女子大学論文集 32, 17-29.
- 川崎末美 2001 食事の質、共食頻度、および食卓の雰囲気が中学生の心の健康に及ぼす影響 日本家政学会誌 52, 923-935.
- 岸田典子・上村芳枝 1993 学童の食事中における会話の有無と健康及び食生活との関連 栄養学雑誌 51, 23-30.
- Kitamura,T. & Suzuki,T. 1993 A Validation study of the Parental Bonding Instrument in a Japanese population. Japanese Journal of Psychiatry and Neurology, 47, 531-535.
- 草間正夫 1992 食生活論 東京裳華房
- 門田新一郎 2002 大学生の食物摂食頻度に及ぼすライフスタイルの影響について ～数量化Ⅱ類による検討～ 学校保健研究 44, 328-337.
- 松田俊 1996 データベースを用いた食行動研究の分析 中島義明・今田純雄(編) 人間行動学講座2 たべる: 食行動の心理学 朝倉書店 Pp.23-43.
- 向井隆代 1998 児童心理学の進歩 37 摂食障害 金子書房 Pp.225-246.
- 永嶋久美子・坂口早苗・坂口武洋 2002 女子学生の偏食行動様式別食習慣および健康習慣の実態 日本公衆衛生誌 49, 447-455.
- 中尾美美子・宮城重二 2001 女子高生の体型、心理状態、食行動、健康行動、健康状態に関する研究 女子栄養大学紀要 32, 73-



84.

根ヶ山光一 1996 乳児期の食行動 中島義明・今田純雄(編) 人間行動学講座2 たべる:食行動の心理学 朝倉書店 Pp.66-78.

根ヶ山光一 2002 発達行動学の視座—<個>の自立発達の人間科学的探究 金子書房

根ヶ山光一・鈴木晶夫(編著) 1995 子別れの心理学 福村出版

Okon,D.M., Greene,A.L., & Smith,J.E. 2003 Family Interactions Predict Intraindividual Symptom Variation for Adolescents with Bulimia. International-Journal-of-Eating-Disorders, 34, 450-457.

小俣里知子・市川陽子・深見和男・今野守 1999 女性の健康志向と食行動との関係 日大生活科研報 22, 27-37.

Parker,G., Tupling,H. & Brown,L.B. 1979 A Parental Bonding Instrument. British Journal of Medical Psychiatry, 52, 1-10.

Rozin,P. 1976 The selection of foods by rats, humans, and other animals.

In J.Rozenblatt,R.A., Hind,C.B., & E.Shaw (Eds.) Advances in the study of behavior, vol.1, NY: Academic Press. Pp.21-76.

Schachter,S. 1972 Some extraordinary facts about obese humans and rats. American Psychologist, 26, 129-144.

Schachter,S., Goldman,R., & Gordon,A. 1968 Effects of fear, food deprivation, and obesity on eating. Journal of Personality and Social Psychology, 10, 91-97.

島井哲志 2002 食行動のアセスメント 日本健康心理学会編 健康心理アセスメント概論 実務教育出版社 159-164.

島井哲志・赤松利恵・大竹恵子・乃一雅美 2000 食行動の自己効力感尺度の作成—日本版過食状況効力感尺度(KC-SAM)および日本版抑制状況効力感尺度(KC-DEM)の妥当性と信頼性— 神戸女学院大学論集 47, 129-

139.

竹内美香 1999 PBIの発生と養育態度尺度の研究 精神科診断学 10, 275-398.

竹内美香・鈴木晶夫 2000 親の養育態度と幼時接触経験 産能短期大学紀要 50周年記念特別号 171-184.

瀧本知憲・西川善之(編) 2003 応用栄養学 化学同人

浦川由美子・佐藤和美・望月一恵・二本木一恵・渡辺和恵・和田真由美 1999 鎌倉女子大学学生の食生活に関する考察(第2報告)—昼食の食行動— 鎌倉女子大学紀要 6, 23-30.

山田重行・西原信彦 1990 小学生における家庭での会話の有無と健康及び食事との関係 保健の科学 32, 59-61.

[2004年5月26日受理]

# The relationships between adolescent eating behavior and teen ratings of their parents' child-rearing attitudes

Akiko Ito\*, Mika Takeuchi\*\* & Masao Suzuki\*\*\*

## Abstract

Recently the implications of eating behavior might become considerable not only in terms of nutrition but also in the context of culture or psycho-sociology. The relationships between family members, including between father and mother and children, should have a significant impact on eating habits and customs as well as on child development.

In this study we administered self-rated questionnaires, on everyday eating habits and on the family culture and intimacy between each of the members, as well as the Eating Attitude Test (Garner and Gafinkel, 1979). In addition to the questionnaire on eating habits, following psychological questionnaires were also carried out and included in this research: the "parental bonding instrument" (PBI; POarker et al., 1979), "self esteem scale" (Endoh et al., 1992) and "feelings of acceptance and intimacy for one's father / mother.

Ninety-seven Japanese female college students (mean age=18.5yr, SD=0.52) participated in this study.

The score of the problematic eating tendencies (EAT score) was found significantly related to some self-esteem scores (feelings of self-insufficiency, embarrassment, and a sense of superiority/inferiority). The parent and student relationships suggest multidimensional impact on everyday eating habits.

I will discuss current lifestyle as related to the eating behavior and culture of modern female adolescents.

**Key words :** family relationship, life style, dietary habits, parenting, adolescent, female, problematic eating, self-esteem

---

\*Graduate School of Human Sciences, Waseda University

\*\*Sanno College, Jiyugaoka

\*\*\*School of Human Sciences, Graduate School of Human Sciences, Waseda University